＜対話と深化＞の女性リーダー育成プログラム

―2005 年度の活動報告と今後の展開―

2006 年 5 月 12 日（金）12：20～13：15
人間文化研究科棟 6 階　大会議室

◆ 学長の言葉

◆ 開会の挨拶と人社系イニシアティブ・プロジェクトの概要
（イニシアティブ責任者）人間文化研究科　国際日本学専攻　　古瀬　奈津子　教授

◆ 参加者による実施報告

・学生海外調査研究
人間文化研究科　比較社会文化学専攻　　竹村　和子　教授
人間文化研究科　ジェンダー学際専攻　　中村　雪子　（訪問国：インド）
人間文化研究科　比較社会文化学専攻　　松永　典子　（訪問国：英国）

・同徳女子大学校大学院との共同ゼミ
人間文化研究科　国際日本学専攻　　森山　新　助教授
人間文化研究科　国際日本学専攻　　高橋　薫

・淑明女子大学校大学院との共同ゼミ
人間文化研究科　国際日本学専攻　　小風　秀雅　教授
人間文化研究科　国際日本学専攻　　伴　ゆりな

・フランスにおける2 つのシンポジウム
人間文化研究科　国際日本学専攻　　ロール・シュワルツ・アレナレス　助教授

【コレージュ・ド・フランス】
人間文化研究科　国際日本学専攻　　森山　新　助教授
人間文化研究科　国際日本学専攻　　川原塚　瑞穂

【ブレーズ・パスカル大学】
人間文化研究科　国際日本学専攻　　高島　元洋　教授
人間文化研究科　国際日本学専攻　　小濱　聖子

◆ 今後の活動予定
人間文化研究科　国際日本学専攻　　小風　秀雅　教授
人間文化研究科　国際日本学専攻　　古瀬　奈津子　教授

＜本年度活動予定＞

◆ 副専攻制度実施　（「男女共同参画リソース」、「文化マネージメント論」）

◆ 学生海外調査研究　（応募〆切　5 月 19 日）

◆ 第 8 回国際日本学シンポジウム　（7 月 8 日～9 日）

◆ 日仏共同シンポジウム　（10 月以降）

◆ 学術合同シンポジウム　（11 月頃）

◆ 国際シンポジウム　（於お茶大、12 月 16 日～17 日）

◆ 台湾におけるジョイント教育

◆ 北京におけるジョイント教育

◆ 英国におけるジョイント教育及びシンポジウム　（1 月頃）

◆ その他

平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ・人文社会系プログラム

「〈対話と深化〉の次世代女性リーダーの育成」

概　　要

お茶の水女子大学大学院は人間文化研究科として学際性・国際性・将来性を重んじる教育にその特徴を有してまいりましたが、このたび、文部科学省より「魅力ある大学院教育」イニシアティブの人文社会系プログラムに採択されました。今日はその平成１７年度の活動報告会を行いたいと存じます。

本プログラムは、現代社会が直面している諸課題に対処するために、日本研究を中心に専門性を深化させつつ、他分野・他領域との「対話」を行いながら、「日本」を対外関係のなかで相対的に把握することができる国際的視野に立つ女性リーダーの育成を目指しています。大学院博士後期課程の国際日本学専攻を中心とし、比較社会文化学専攻とジェンダー学際研究専攻とが連携して行う大学院教育プログラムです。

具体的な教育プログラムとしては、①国際的なジョイント教育により大学院生の学際的・国際的研究能力を高めること（海外提携大学などとの共同ゼミ・シンポジウム）、②学際性を深めるために副専攻制度を施行すること（男女共同参画リソース・文化マネージメント）、③博士学位取得のプロセス・審査を透明化し、そのためのスキルを開発すること（学生海外調査研究、英語によるプレゼンテーション能力充実のための「英語アカデミック・プレゼンテーション」の開講）などがあげられます。これらのプログラムの実施を通じて、博士前期課程・後期課程一貫教育の実質化をはかり、博士論文の早期完成へと導くプロセスを明確化してまいりました。

今日はこのうち、学生海外調査研究、韓国の２大学（同徳女子大学校、淑明女子大学校）との共同ゼミ、フランスの２大学（コレージュ・ド・フランス、ブレーズ・パスカル大学）との共同ゼミとシンポジウムについて、参加した教員・大学院生の方々から報告をしていただき、その成果をうかがいたいと存じます。今年度、学生海外調査研究など本プログラムに参加したいと考えている大学院生には参考にしてもらいたいと思います。

最後にこれらの平成１７年度の教育成果をふまえて、今年度（平成１８年度）の活動計画についてその概要を示し、本プログラムに対するご理解・ご協力をいただきたいと存じます。

（古瀬奈津子）

採択者内訳

専攻	国（場所）	期間	
国際日本学	韓国(ソウル)	20 日間	植民地朝鮮における浅川伯教・巧兄弟と柳宗悦の民芸運動:その今日的意義を中心に
〃	中国(上海/北京)	14 日間	中国語母語話者の初対面会話における話題転換研究：話題転換のプロセスと話題転換ストラテジーを中心に
〃	米国(ボストン)	9 日間	岡倉覚三とボストン：ボストン美術館中国日本美術部経営に関する調査研究
比較社会文化学	英国(ロンドン)	11 日間	14-16 世紀ロンドンのミンストレルに関する史料調査
〃	英国 (ロンドン/エジンバラ)	15 日間	第一次世界大戦後の英国モダニズム伝記文学における人種の境界
〃	ドイツ(ベルリン)	29 日間	<閉経>をめぐるポリティクス：世紀転換期ドイツにおける医学概念受容のプロセス
〃	フランス(パリ)	21 日間	1920 年代における 19 世紀美術史の成立とモーリス・ドニ《フランス美術の歴史》(プティ・パレ丸天井壁画,1925)
ジェンダー学際研究	独(ベルリン) 仏(パリ)	9 日間	「国際結婚を考える会」海外グループの成立と展開：日本人女性配偶者の国境を越えた活動の軌跡
発達社会科学(前期)	バングラデシュ (ダッカ)	16 日間	「多国間繊維取り決め」撤廃後のバングラデシュ縫製産業の実態とそれに伴う縫製工場女性労働者への影響
〃	インド(ニューデリー)	10 日間	インド・ラージャスターン州・ジャイプル県女性酪農協同組合現地調査
〃	シンガポール	10 日間	中国語母語話者の初対面会話における話題転換研究：話題転換のプロセスと話題転換ストラテジーを中心に

学生海外調査研究報告
「インド・ラージャスターン州・ジャイプル県女性酪農協同組合現地調査」

報告者：ジェンダー学際研究専攻（調査実施時は開発・ジェンダー論コース在籍）1 年　中村雪子

2006 年 5 月 12 日

□海外調査研究概要
■場所：インド、ラージャスターン州、ジャイプル県（調査対象組合／県酪連スタッフなど）
■期間：2006 年 2 月 16 日(木)～25 日(日)
■調査の位置付け：博士後期課程 2 年次から予定している長期現地調査の予備調査／補足調査と位置づけられる。

□報告者の研究背景
■学部（東京外国語大学、ヒンディー語と南アジア地域研究を専攻）論文（『インドの酪農開発と女性』）から、女性酪農協同組合（Women’s Dairy Cooperative Society、以下 WDCS）の研究とラージャスターン州での地域調査を始める。
■本学開発ジェンダー論コースに提出した修士論文では、三ヵ月の現地調査結果から、偶発的に地域に投入された女性酪農協同組合によってひきおこされる変動を描き出すことを試みた。
■博士論文では、特に二つの問題枠組みから研究を進める予定である。一つは、グローバルな市場と関連付けて女性組合を捉える視点である。二つめとしては、農村女性が、彼女たちに偶発的にもたらされた WDCS を、酪農開発政策当局の意図とは異なるかたちで利用する可能性についての検討を行う予定である。

□ インドの女性酪農協同組合概略
現在世界第一位のミルク生産量を誇るインドでは、1960 年代から大規模酪農開発の一環として、多くの村落に酪農協同組合が組織されていたが、実際の家畜飼育・搾乳労働に従事する農村女性たちが組合員として参加することは少なかった。その後開発に女性を組み込んでいくことを奨励する流れから、1990 年代初頭から開始された開発プログラムとしての WDCS が、インド全域において増加している傾向が観察されている。先行研究においては、WDCS は、女性のみで構成・運営される組織であり、活動への参加から「抑圧されてきた」女性たちの経済的社会的政治的エンパワメントが達成されるとして、評価するものが多い。

□ イニシアティブ・プログラムの意義
歴史的に検証すると、上述の開発プログラムが「公平性」という観点からだけではなく「効率性」の追求からも成立していることが推測される。この状況を考えるためには、WDCS が実際に運営されている現地での調査が不可欠であると考え、修士論文においてもできる限りの現地調査を行った。このように海外にフィールドを設定する地域研究、「ジェンダーと開発」研究などの研究領域では、現地調査が非常に重要な研究方法と位置づけられる。現状では、現地調査を行う修士課程の学生向けの助成金はきわめて少なく、忙しい学生生活の中で海外調査費用を用立てることは学生にとって大きな負担になる場合もある。大学院の前期・後期一貫教育を目指す本イニシアティブ・プログラムの「学生海外調査研究」は、修士課程の学生が助成金を得る貴重な機会を作っていると考える。

□ 調査内容（抜粋）

■　2 月 20 日（月）男女混合女性酪農協同組合である A 組合訪問

博士論文では、WDCS をより一般化して捉えるために、修士論文での調査対象である WDCS に加えて、複数の酪農協同組合の調査を予定している。選定基準は検討中であるが、男女混合組合を訪問することでその手がかりを得た。

■　2 月 22 日（火）B 女性酪農協同組合での自助グループ設立プログラムに参加

自助グループの活動を通して、女性たちは乳代から貯金することが可能になり、女性たち自身が団体を運営し資金の管理をする機会を得ることになる。同時に農村女性が女性酪農協同組合を通してグローバル市場と直結した「金融」というもう一つの回路に組み込まれるという可能性が考えられる。グローバル市場と女性酪農協同組合をめぐる議論との関連で、自助グループは重要な調査対象であると認識している。本調査では、自助グループが女性酪農協同組合内においてまさに立ち上げられる瞬間を観察するという非常に有意義な機会を得られた。

イニシアティブ・プログラムの助成をうけて修士課程でありながら、実施できた本調査結果から、博士後期課程で研究を進めるにあたって重要な指針となる知見を得ることができた。

2006 年 5 月 12 日

報告者　人間文化研究科比較社会文化学専攻　松永　典子

魅力ある大学院イニシアティブ「〈対話と深化〉の次世代女性リーダーの育成」

学生海外調査研究報告の実施報告

０．　研究の位置づけ

博士論文「大戦間期の英国伝記文学」(仮題)

１章　第一世界大戦までの英国の伝記の概観

２章　外交理論家の伝記技術――伝記文学と政治の交差点

３章　〈帝国〉の「外部」の伝記――〈アラビアのローレンス〉

４章　人種の「境界」

↓

05 年度 COE プログラム F-GENS シンポジウム若手研究者企画セッション

分科会 A「境界に挑戦する」参加

↓

１．調査研究の目的　(研究題目)

「大戦間期の英国伝記文学における人種と性の境界」

２．　海外調査研究の場所・時期

時期：　平成 18 年 2 月 10 日–同年 2 月 24 日

場所：　大英図書館(ロンドン、英国)　…A

大英図書館分館新聞資料室(同上)　…B

英国国立海事博物館(同上)　…C

３．　調査の実際

調査資料：船舶関係者専門誌 *Seaman*（1914 年 1 月—1936 年 12 月）

４．　資料収集費用

貴重資料の依頼複写代金（概算）

	A&B	C	計
コピー	(100〜200 円/枚)*×約 150 枚	—	20,000 円
写真現像	—	(3,700 円/枚)×21 枚	77,700 円
			合計 97,700 円

単位：円（1 ポンド＝210 円で換算）

＊原稿サイズ等によって異なる。

５．　調査研究の成果

韓国・同徳女子大学大学院とのジョイント教育

森　山　　新

本学と同徳との間のジョイント教育では、「グローバル時代の日本語教育」をテーマに、３日間にわたる共同授業と、２日間の韓国日本学会参加が実施された。今回のテーマは、グローバル時代を迎え、日本語教育のあるべき姿を考えるためには、まずもってこれまでの日本語教育をふり返り、過去と現在を反省することが必要であり、それなくして日本語教育がこれからのグローバル化に貢献することはできないという認識を背景としている。そのため、今回は日本と韓国の学生だけでなく、日本語教育のさかんな中国、台湾の本学大学院生も加わり、活発な討論が展開された。

２月６日（月）、日本側一行は韓国へ向け出国。夕食を囲みながら打ち合わせを行った。

２月７日（火）から９日（木）までの３日間は、同徳女子大学校において、「グローバル時代の日本語教育」というテーマでのジョイント授業が開催された。

１日目は、同徳・大学院生の森伊作さんを司会に、まず、本プログラムを企画した本学森山新助教授より、本プロジェクトの趣旨説明があった。そのあと、同徳女子大学校、李徳奉教授が「交流型日本語教育のためのリソースとリテラシー」という講義を行った。

午後には、同徳側の発表と質疑応答、総合討論があった。発表者は以下の通りである。

「テグ国際理解教育センター実践報告」（同徳女子大学校・大学院　倉持香）

「交流における日本語教育の可能性」（同徳女子大学校・大学院　黄圭仙）

「教育理念について」（同徳女子大学校・大学院　佐野澄子）

「交流と対日観」（同徳女子大学校・大学院　磐村文乃）

２日目は、本学・大学院生の高橋薫さんの司会で行われ、午前中には、本学の森山新助教授が「グローバル時代の日本語教育」と題し、本年度より本学に開設された「グローバル文化学環」の試みなども含めて講義を行った。

午後には、本学大学院生らにより、以下のような研究発表があり、その後、全体でグローバル時代に求められる日本語教育とはどのようなものかについて活発な議論が行われた。

「日本語に関わる経験によって韓国人学習者の認識はどのように変わるかー韓国人留学生に対するインタビュー調査からー」（本学・大学院　河先俊子）

「台湾における日本語教育の過去と未来」（本学・大学院　孫愛維・張瑜珊・林美琪）

「中国における日本語教育の現在と未来」（本学・大学院　王冲・文鐘蓮）

３日目の２月９日は、午前中、「韓国大学生の対日観と学習動機の変化」と題し、同徳女子大学校の奥山洋子助教授から講義があった。その後、同徳女子大学校総長を表敬訪問した。孫総長の表敬訪問は１年前の協定締結時以来のことであった。

午後は従軍慰安婦の施設、「ナヌムの家」を訪問し、ビデオ視聴、博物館見学、かつて従軍慰安婦であったあるハルモニの講演などを通じ、過去の日本語教育の一面をふり返った。

２月 10 日（金）、11 日（土）の２日間は、韓国で日本学研究を行う「韓国日本学会」の第 72 回学術大会（会場：慶熙大学校）に参加した。参加者の何名かは研究発表も行った。

日韓共同授業に参加して

お茶の水女子大学大学院
人間文化研究科　国際日本学専攻
高橋　薫

2006 年 2 月に韓国にて、お茶の水女子大学大学院（以下、お茶大）と同徳女子大学大学院（以下、同徳大）による日韓共同授業がおこなわれた。「グローバル時代の日本語教育」というテーマのもと、日韓双方の学生が共に学びあい、対話を通してお互いの理解を深めようという試みである。メンバーの構成は、お茶大側が日本語教育を専攻する日本人学生、中国、台湾からの留学生、同徳大側は日本語教育を専攻する韓国人学生、及び、日本人学生である。参加した院生のほとんどが、既に日本語教師として教壇に立っている。この他に、韓国の大学で教鞭を執っているお茶大の修了生も加わって、実践に根ざした活発な話し合いが行われた。ここでは、共同授業終了後に寄せられた双方の学生の感想や提言を総括し、紹介する。

お茶大側の参加者は歴史認識について多くのコメントを寄せている。

- ひとたび日本を離れると、日本語教育は過去の歴史と切り離すことができないことを痛感する。
- 「グローバル化」という言葉に潜む、深さと難しさを含んだ内容だった。
- 韓国、中国、日本の間には歴史問題について明らかに問題意識に差があり、それぞれの状況を知ることができた。
- 単なる日本語の教育だけでなく、両国の歴史、文化などを中心に据えた日本語教育をしなければならない。
- 今回のジョイント授業は、日ごろ避けてしまいがちな問題について、日本、韓国、中国、台湾の学生達が率直に互いの意見を聞ける貴重な機会だった。私にとっては韓国人日本語教師の難しい立場を知ることができたのも一つの収穫だった。
- 授業後に設けられた食事会などの場で、研究者を目指す者として、また女性として共通認識を確認できたことによって、同徳女子大学の学生さんたちをより身近に感じることができた。

同徳大では定期的に日本の大学との共同授業をおこなっており、これまでの他大学との共同授業の経験を踏まえた上で、多くの提言やコメントが寄せられた。

- 日頃思いもつかなかったような研究の視点を日本側の院生や先生から得ることができた。
- 日韓中の日本語教育の歴史認識問題についてもっとメスをいれることができるセミナーを開けば、いろいろな方向に発展できる。
- 日本と韓国だけでなく台湾・中国からの留学生も参加し、ノンネイティブとして日本語教育をおこなう上での悩みに共感を覚えた。また、台湾・中国で行われている日本語教育の現状も知ることができてよかった。
- 自分の価値観が普遍的でないことに気がついた。
- 合同セミナーの成功の可否は参加者のセミナーのテーマについてのはっきりとした認識と準備過程によって決まるので、セミナーの準備段階から多様なネットワークを通じて意見交換をおこなうなど、綿密な事前活動が必要だ。
- ジョイントセミナーが一回で終わってしまって内容面で連続性がない。その後の発展がほしい。

以上のように、今回の共同授業は、双方の学生にとって日本語教育をおこなうことの意味を問い直す契機となったようだ。お互いがお互いのことに関心を持ち、複眼の視点を持って物事を捉える、グローバル時代の日本語教育には、そのようなスタンスが望まれるだろう。韓国側の学生の指摘にもあるように、1 回限りの共同授業ではなく、継続的な展開を期待したい。

韓国・淑明女子大学大学院とのジョイント教育・実施報告

２００６年５月１２日

国際日本学専攻　　小風秀雅

日　時　　２月７日（火）～１２日（日）

場　所　　淑明女子大学校

参加者　　本学　教員２名（神田・小風）、大学院生６名（日本４、韓国１、中国１）

淑明　教員５名（権粛寅、金、権、朴、李）、学生十数名（大学院生１０、学部学生若干名）

２月　７日　　韓国到着・事前打ち合わせ

２月　８日　　ソウル大学奎章閣、国立中央博物館（歴史館）の見学

２月　９日　　**共同ゼミ（１）「日本の文化と社会」**

２月 10 日　　**共同ゼミ（２）「国際社会と東アジア」**

２月 11 日　　**参加学生による自主ゼミ**

２月 12 日　　帰国

第一日　　共同ゼミ（１）「日本の文化と社会」

1. 神田由築（お茶の水女子大・助教授）「歌舞伎『勧進帳』の背景－『杖で打たれる』ということ」
2. 申裕媛（淑明女子大・院生）「肥前名護屋城とその城下町について」
3. 朴晋雨（淑明女子大・助教授）「民間レベルでの日韓交流になにが必要か」
4. 大矢悠三子（お茶の水女子大・院生）「鉄道の開通と「湘南」イメージの形成
－海水浴の受容と発展との関連を軸に－」

第二日　　共同ゼミ（２）「国際社会と東アジア」

1. 小風秀雅（お茶の水女子大・教授）「19 世紀の不平等条約と東アジア－不平等条約体制の機能について－」
2. 李志炯（淑明女子大・助教授）「韓国での日本文学受容の意味－1980 年代以降を中心に－」
3. 古結諒子（お茶の水女子大・院生）「日清戦争下の外交関係－「三国干渉」への道」
4. 朴玟宣（淑明女子大・院生）「1945 年～1953 年の‘在日’マイノリティー運動の研究現況と課題
－在日本朝鮮人連盟と沖縄人連盟を中心に－」

第三日　　参加学生による自主ゼミ

淑明女子大学　　金仁京「『恍惚の人』についての検討」

黄正媛「日本における韓国大衆文化の受容に関する研究－韓流の現状と効果－」

朴■（女偏に周）榮「日本の伝統芸術が近代西洋の芸術に及ぼした影響と
その背景について－浮世絵と能を中心にして－」

李政炫「日本人の集団意識（日本の漫画を通して見た）」

金準栄「日本中小企業の賃金制度に関する研究－ITとBT産業を中心に－」

お茶の水女子大学　高垣亜矢「近世筑前国の皮革流通について」

張■（草冠に凡）「戦間期東京の都市計画と地下鉄建設」

伴ゆりな「『皇室』に関する日本の政策
－日本の皇室制度と韓国併合後の旧韓国皇室の処遇、『満州国』帝室のあり方－」

淑明女子大学大学院との共同ゼミ報告

人間文化研究科　国際日本学専攻　伴ゆりな

■　特徴と成果

両国から複数の学生が参加（ゼミとゼミとの交流）……互いのイメージが掴みやすい、議論しやすい
言語による意思疎通が可能な状況……短期間でも研究内容に立ち入った具体的な議論が可能
異なる発想との出会い……研究報告に対し日韓で異なる視点を示し合うことによる視野の拡大
学生間ネットワークの形成……それぞれの研究関心を知り、連絡を取り合える関係に

■　２月１１日　自主ゼミ内容

発表者以外の学生８名が研究紹介の機会を得、それぞれの研究テーマに関して両大学の教授、学生間でアドバイスや意見交換を行った

【淑明女子大学学生】

・金仁京「『恍惚の人』についての検討」

作家有吉佐和子が日本の文壇で十分に評価されていない理由を、作中人物が男性中心的なジェンダー規範に対し最終的には妥協してしまう点にあると分析した。お茶大の学生から、日本では賞の受賞が必ずしも文壇での評価であるとは限らないというアドバイスがあった。

・黄正媛「日本における韓国大衆文化の受容に関する研究――韓流の現状と効果――」

「冬のソナタ」以来の日本における韓流が継続的な維持発展を遂げる方法は何か。いわゆる韓流が日韓ともに30代以上の女性によって支持されている点、韓流が日本においてほとんど女性にしか広まっていない点が重要であるとの議論が行われた。

・朴炯榮「日本の伝統芸術が近代西洋の芸術に及ぼした影響とその背景について――浮世絵と能を中心にして――」

西洋において、日本文化が「東アジアの文化」というコードを乗り越えて「東洋的なもの」というイメージが形成されている問題を考える。例えば箸はアジア全般のものでありながら西洋においては日本のものとして意識されるといった現象について、お茶大、淑明大双方の参加者から興味が持たれた。

・李政炫「日本人の集団意識（日本の漫画を通して見た）」

日本人の集団意識を、日本の漫画に描かれる人物像や心理を通して分析する。お茶大からは、漫画は読者層や掲載雑誌を意識する必要が指摘された。

・金準栄「日本中小企業の賃金制度に関する研究――IT と BT 産業を中心に――」

日本の先端中小企業の賃金制度に関して研究し、近年韓国において数多く設立されている IT、BT 関連の最先端会社に必要な新たな賃金制度の在り方を模索する。お茶大からは、調査地域を東京と大阪に限定する方法に対し、都市から離れた周辺や地方に会社を置く傾向があることが助言された。

【お茶の水女子大学学生】

・　高垣亜矢「近世筑前国の比較流通について」

身分制社会の解明に重要な、賤民の実態を明らかにする。淑明大からは、身分解放後、従来皮革に関わっていた人々の職業の変化が日韓で異なる点が指摘され、韓国の場合が説明された。

・張芃「戦間期東京の都市計画と地下鉄建設」

中国からの留学生による修士論文テーマの発表。日本の地下鉄が関東大震災後に都市計画に組み込まれ発展した経緯を研究する。都市計画と地下鉄の敷設についてお茶大、淑明大双方から関心がもたれた。

・伴ゆりな「「皇室」に関する日本の政策――日本の皇室制度と韓国併合後の旧韓国皇室の処遇、「満洲国」帝室のあり方――」

日本の皇室制度整備、日本による旧韓国皇室の処遇、「満洲国」帝室の位置付けについての研究。淑明大の学生からは現在の日本人一般が天皇家を神聖視している印象があると指摘があり、韓国から見たイメージが明らかになった。

2006.05.12
ロール＝シュワルツ・アレナレス
比較日本学研究センター助教授
schwartz@cc.ocha.ac.jp　tel/fax 03-5978-5215

魅力ある大学院教育イニシアティヴ
「〈対話と深化〉の次世代女性リーダーの育成」プログラムによるシンポジウムについて

お茶の水女子大学比較日本学研究センターは、「魅力ある大学院教育イニシアティヴ」プログラムの一環として、今年 3 月 24 日と 25 日にパリで、29 日にクレルモン・フェランにおいて、フランスの権威ある研究所や大学と共同で、二つの国際シンポジウムを開催することができました。これらのコーディネーターを務めさせていただいた私から、その成果と今後の展望につきまして報告させていただきます。この二つのシンポジウムは、その新しさ、規模、発表の質、そしてそこで結ばれた学術的な交流関係から、比較日本学研究センターだけでなく、お茶の水女子大学の国際交流においても、非常に重要な出来事となったのではないかと思います。綿密な準備期間を経て、15 人ほどの大学院生と教員が多くのヨーロッパの研究者と共にフランスで研究発表を行った、まずはこの大きなプロジェクトの発端となった動機からお話しさせていただこうと思います。

I.シンポジウム開催の発端と動機

このシンポジウムの経緯を振り返るにあたり、その構想が比較日本学研究センターの掲げる目標と直接的に関わることから、最初にこのセンターについて簡単に紹介させていただきます。本校に 2004 年 4 月に開設された、複数の学問領域にまたがるこの研究センターは、すでに 15 名ほどの研究員を擁し、日本学という分野において、世界中の研究拠点と交流関係を結ぶことを使命としており、共同研究プロジェクトの実現と、情報の収集と発信に努めています。

2004 年 7 月より、私はこの新設のセンターの初めての、そして唯一の専任助教授として迎えていただきましたが、まず目標に掲げたことは、センターの存在を早急に広め、スケールの大きいプロジェクトを通して、多分野にまたがる研究グループとしての統一性と方向性を確立することでした。こうした思いから、当時のセンター所長であった高島元洋先生と協議したうえで、去年の 3 月この二つのシンポジウム開催を提案しました。のちほど紹介しますが、このシンポジウムの掲げたテーマとその目標は、外国における日本学の受容と普及の問題、そして比較研究的な方法論に焦点をあてるものとなりました。また一方で、シンポジウム開催地であるフランス、そして広くヨーロッパは、日本学と哲学の分野では非常に古く豊かな伝統を誇り、「魅力ある大学院教育イニシアティヴ」プログラムの特色である「対話と深化」を追求することが可能な土壌であったといえます。

2005 年後期にこのプログラムから支給された研究費によって、このプロジェクトを実現することができたうえに、当初予定されていた参加者に、更に 5 人の大学院生を追加することができ、シンポジウムは非常に意義深いものとなりました。

ここで、それぞれのシンポジウムの主な特色を検証してみたいと思います。

II. シンポジウムの共催者とテーマ

ヨーロッパの研究者らも関心がもてるような統合的なテーマの下に、まだ設立間もないセンターの研究員たちをひとつにまとめるために、他の先生方の賛同と、とりわけ高島先生、小風先生の励ましをいただき、内容的にも方法論的にも異なる二つのシンポジウムの開催を提案しました。

パリ：フランスの日本学とのハイレベルなシンポジウム

パリで 1 日半かけて行われた最初のシンポジウムは、比較日本学研究センターとフランスにおける日本学の代表的な研究機関との接触が主な目的でした。そこで、日本社会科学・人文科学研究グループ（GREJA）のフランス人研究者らとコンタクトをとったところ、シンポジウムの共同開催の承諾をいただきました。主にパリ第 7 大学日本学科の教員と研究員で構成されるこの大規模な日本学研究チームは、権威あるコレージュ・ド・フランスの中に設置され、その準会員にはフランス国立科学センター（CNRS）、フランス極東学院（EFEO）、フランス国立社会科学研究院（EHESS）、フランス国立東洋語・東洋文化研究院（INALCO）やヨーロッパ、日本の大学など、多くの教育・研究組織の研究者が名を連ねています。社会の変動や、古典・近代文学の分析を主な研究対象とするこの研究チームは、また日本研究者や博士課程の学生の交流と討論の場を提供することにも重点を置いています。その活動は多岐にわたりますが、すべてのプロセスは人文・社会科学的な問題の方法を取り入れながら、日本についての研究の敷居を取りはらうという共通の関心事の上に成り立っています。

「18 世紀ー19 世紀、江戸から東京へ：都市文化の構築と表象」という私達のセンターが掲げたテーマは、その内容の幅の広さ、今日性、そして文学、歴史、社会、芸術といった多領域にまたがるアプローチから、シンポジウムのフランス人側の共催者の期待と問題提起に一致するものでした。ヨーロッパの日本学のなかでもとりわけ活発な江戸文化、明治期の変動についての研究、また数年前から取り上げられるようになった日本の都市の問題に関する考察は、フランスでも絶えず発展し続けており、今日では厳密な日本学という範囲を超えて関心を呼んでいます。

今年 3 月は全国的な学生デモによってフランスの大学は大いに混乱していたこも関わらず、コレージュ・ド・フランスの講義室で行われたこのシンポジウムに多くの聴講者が訪れたことは、フランス人のそうした日本に対する関心をよく示しているといえます。本学からは 3 人の教員と 4 人の学生が参加したこのシンポジウムにつきましては、のちほどセンター所長の森山先生からお話いただきます。

クレルモン・フェラン：新しい対話—普遍的価値を求めて—

3 月 29 日にクレルモン・フェランで行われたシンポジウム「哲学・倫理・宗教思想－日本とフランス：交錯する視点－」には、本学から 4 人の教員と 4 人の学生が参加し、こちらも成功のうちに終了することができました。このシンポジウムは、比較日本学研究センターの基盤でもある比較方法論を試すことを目的に行われたものでした。

その点で、シンポジウムの共催者であるブレーズ・パスカル大学哲学・合理性研究センター(PHIER)の研究者たちは、私達センターにとってまずなにより“対話者”でした。クレルモン・フェラン人間科学研究所に拠点を置く哲学・合理性研究センターは、その目的、活発な研究活動、比較哲学という分野における国際的な認知により、7 年前から知・科学哲学、論理・言語哲学、システムの歴史、実用的合理性といった分野において、合理性の研究プログラムを展開し、比較研究でもって哲学史と最先端の哲学の考察を行ってきた研究チームです。主にブレーズ・パスカル大学哲学科のメンバーで構成されるこのセンターは、また多くの客員研究員を擁し、コレージュ・ド・フランス、エクス・マルセイユ大学といったフランス国内に限らず、ミラノ大学、ヘルシンキ大学、ミュンヘン大学、イギリスのキングス・カレッジ、あるいはカナダ、アメリカ、ブラジルの著名な大学と定期的な交流を行っており、比較哲学に焦点をあてたいくつかの大学間の協力関係をすでに発展させています。

真の知的冒険であったこのシンポジウムは、日本思想と西洋哲学の間の初めての徹底した比較論的な対話の試みとなり、共催者の双方にとって非常に重要な意味をもつものとなりました。

日本と西洋の哲学史における主要な作家の倫理的、宗教的作品を取り上げながら、発表者はそれぞれの専門分野を通して、人間の行動、言語、神の表象といった観念が関係する一般的なテーマを浮き彫りにしました。のちほど高島先生より詳しくお話いただきますが、長い間、日本思想に対する非発展的な言説を支えてきた初歩的なオリエンタリズムとは反対に、発表者らは西洋と日本の概念が対話を通して、いかに普遍的な価値感の創造に協力していけるかを模索しました.

一方で、数十年前からフランスの日本学者は、宗教史と日本思想の研究において重要な位置を占めてきましたが、比較哲学という異なる学問領域において行われた今回のシンポジウムは、扱われた内容、そこで結ばれた交流という点で、全く革新的な視野を切り開いたといえます。ブレーズ・パスカル大学で行われた対話と哲学的な探求は、一般的にこれまで言語や文化が専門の日本学者の間にのみ限られてきましたが、その規模、方法、質からも、本シンポジウムはヨーロッパにおいて新しい試みでした。

III. シンポジウムの特色と成果

A 特色

最後に、これらのシンポジウムの特色と、そこから得られた成果についてお話させていただきます。

１．参加型の国際討論の呼びかけ

今回の準備にあたり、できるかぎり共催者側にロジスティックな面でのパートナーとしてだけではなく、シンポジウムでの発言者として積極的に参加をしてもらいたいという提案をしました。つまり、ただ単にフランスへ移動して聴講者の前で研究発表をするのではなく、優秀な研究者らにシンポジウムのテーマに関する研究を発表してもらい、またセッションの進行役をお願いしたり、あるいは討論会を開催してもらい、“対話”を実現させようという計画でした。その結果、ヨーロッパ側からは 12 人の研究者がこの二つのシンポジウムに参加しました。

２．翻訳・通訳

発表者全員の原稿を事前に翻訳したこと、そして討論の際の通訳もまた、今回のシンポジウムの成功にとって、そして長い目で見てシンポジウムから得られる成果にとっても不可欠の役割を果たしましたが、これも「魅力ある大学院教育イニシアティブ」プログラムによる資金援助なしには実現しえませんでした。日本側は頼住光子先生、フランス側は現在東京大学に在籍している INALCO の日本文学博士課程の学生、イヴリンヌ・ルシーニュ＝オドリー氏と私自身が翻訳のコーディネートを担当し、シンポジウムの際に聴講者や発表者に翻訳された原稿全てを配布することができました。また、現在京都の日本文化研究所に在籍している INALCO の博士課程のマティアス・アイェク氏には、見事な通訳をしていただきました。

３．その他の文化活動

日本側の参加者の方々には、それぞれの専門やセンターの目的に関連した文化活動を提案しました。パリでは、日本社会科学・人文科学研究グループ GREJA の研究者らを伴いコレージュ・ド・フランス付属図書館を訪問、また学芸員のヴェロニク・ベランジェ氏の案内でフランス国立図書館の東洋写本部門も訪れ、私自身 4 年間勤務した国立東洋美術館も訪問しました。

クレルモン・フェランでのシンポジウム終了後は、ブレーズ・パスカル大学に属するフランス人メンバー数人と共に、その地方の見事なロマネスク教会や、ルネッサンス時代のメイアン城(château de Meillant)を訪れました。

こうした活動により参加者らは、一般的にフランスで行われている研究、とりわけ日本学の研究

を特色付ける文化的、歴史的背景、そしてそれを支える研究ツールと研究施設をより理解することができたのではないかと思います。そして、フランス人の研究者らとの親睦を深める結果ともなりました。

B. 成果

シンポジウムの成果として、次のことが挙げられます。

□ヨーロッパの日本学研究における重要なネットワークの構築。

多くのフランス人日本学者が、講演者、あるいは原稿の翻訳者や通訳者として参加し、それによって比較日本学研究センターの存在とその目的を効率的(こうりつてき)に広めることができました。

□シンポジウム議事録の二ヶ国語出版と普及。

発表原稿の事前の翻訳により、議事録はセンターより早速今年度中にも出版される予定となっています。コレージュ・ド・フランスからはすでに、付属の出版会からの出版が提案されており、クレルモン・フェランのセンターは哲学の分野で有名な国際出版社 Georg Olms 社からの出版を検討しているようです。この二カ国語の議事録は、ヨーロッパの日本学者のみならず、日本文化に興味をもつ幅広い層の読者を得るものと思います。

□共同研究および大学間協定に関するプロジェクト

二つのシンポジウムを終え、大学間の交流、協定締結の見通しが具体化し、本学とパリ第 7 大学およびブレーズ・パスカル大学で現在検討が進められています。パリでのシンポジウムのフランス人発表者から二人、ブレーズ・パスカル大学から三人、すでに比較日本学研究センターが今年度中に開催するシンポジウムに招待しています。そして、コレージュ・ド・フランスの研究者との共同研究計画が検討されています。クレルモン・フェランでのシンポジウムの発表者全員とはすでに共同研究の計画が始まっており、すでに客員研究員として当センターに関わっています。並行して日本側の参加者も、ブレーズ・パスカル大学哲学・合理性研究センターの客員研究員として声が掛かっています。

結論

「魅力ある大学院教育イニシアティヴ」プログラムの支援を得て開催された二つの大きなシンポジウムによって、お茶の水女子大学比較日本学研究センターは、ヨーロッパにおいて学術的にも制度的にも認知され、センターの研究員は野心的な国際共同プロジェクトを構想することが可能となりました。お茶の水女子大学とセンターの研究員が、今回の成果を長期にわたって熟成させ、日本や海外でこのまたとない出会いの場から生まれた期待と要求に応えていけるよう、そのために必要な人的、経済的資源を有することができるようになることを願ってやみません。

フランス・パリにおけるシンポジウム報告

森　山　　新

2006 年３月 24 日～25 日の２日間、フランス・パリのコレージュ・ド・フランス（Collège de France)において、本学比較日本学研究センターが主催、コレージュ・ド・フランス、日本学高等研究所、文明研究所、ソルボンヌ パリ 4 極東研究所の共催で合同シンポジウムが開催された。テーマは「18 世紀から 19 世紀、江戸から東京へ：都市文化の構築と表象」で、文学、地理学、建築学、歴史学のそれぞれの視点から発表と討論が行われた。

シンポジウム第１日目の 3 月 24 日には以下のような発表があった。

「近世軍記『鎌倉管領九代記』の相州玉縄」　森 暁子（本学博士後期課程）

「井原西鶴に見る江戸の町」ダニエル・ストリューヴ（パリ第７大助教授）

「明治の東京：樋口一葉の小説を視座として」菅 聡子　（本学文教育学部助教授）

「深川の情景：泉鏡花の小説を手がかりに」川原塚 瑞穂　（本学博士後期課程）

「河川の流れに町を読み取る」ロシェ・ベンジャミン（リヨン第２大学）

その後、内容に関しパネルディスカッションが行われた。

シンポジウム第２日目の 3 月 25 日には以下のような発表が行われた。

「ルイ・クレットマンの写真コレクションに見る明治期の日本建築」

ニコラ・フィエヴェ（仏国立科学研究センター研究員）

「『江戸名所図会』について」藤川　玲満（本学博士後期課程）

「19 世紀中葉フランスにおける名所図会の受容：フランスのコレクションを通して」

ヴェロニク・ベランジェ（仏国立図書館管理員）

「過去を再現する：『古きフランスへのピトレスク、ロマンチック紀行』に見られる名所、歴史的建造物」　　アニー・ルノンシア（パリ第７大教授・文字研究センター所長）

「明治期東京の名所と観光案内書」髙槻 幸枝　（本学博士後期課程）

「江戸の妖怪と都市空間」内田　忠賢　　（本学人間文化研究科助教授）

「暁斎の滑稽な化け物たち」及川 茂　（パリ第７大客員教授・日本女子大教授）

「江戸の都市と芸能文化」神田 由築　（本学人間文化研究科助教授）

その後、内容に関し活発なパネルディスカッションが行われた。

26 日、27 日には、ギメ美術館、ルーブル美術館、フランス国立図書館などを見学した。

帰国後、現地の日本人の先生より、神田助教授宛てに一通のメールが届いた。それによれば、今回のシンポジウムは今までに参加したシンポジウムに比べて、テーマ設定、通訳・翻訳などの運営、大学院生の参加などの面で優れていて有意義であったとのことであった。また共催大学の一つで日本研究の盛んなパリ第７大学からは、今後の交流継続と協定締結の希望があり、これらは今回のシンポジウムの成功を物語っている。

片道 12 時間を要し訪仏して行われた今回のシンポジウムであったが、日本で日本学研究を行う我々にとってもその意義は大であったと言わざるをえない。日本学研究は日本国内で完結すべきものではなく、「内からの視点」と同時に今後よりいっそう重要となっていくのが、海外でいかに日本研究が行われているかを知るという、「外からの視点」である。また同じ「外からの視点」であっても、東洋における日本学研究と西洋における日本学研究の違いも今回実感した点である。今後このような日本学研究のネットワークが維持、拡大され、日本学研究が国際化していくことが望まれよう。

2006 フランスシンポジウム報告

2006 年 5 月 12 日

お茶の水女子大学博士後期課程　川原塚瑞穂

2006 年 3 月 24 日～25 日、パリで開催されたシンポジウム「１８世紀～１９世紀、江戸から東京へ：都市文化の構築と表象」では、江戸・東京の都市文化について計１３名の研究発表が行われた。

１日目は、主に文学テクストを分析対象とした発表が行われ、井原西鶴、樋口一葉、泉鏡花や永井荷風ら、江戸時代、明治時代の文学から見た都市文化の表象が論じられた。そして２日目には、写真や名所図会、観光案内、怪談、妖怪絵巻や歌舞伎興行といった視覚表象・芸術などを中心とした発表が行われ、人々の生活する都市空間・文化、そしてそこに向けられるまなざしが論じられた。これらの発表において、文学研究、ジェンダー研究、歴史学、地理学、芸術諸学など、人文系のさまざまな研究視点からのアプローチがとられており、学問領域を横断した学際的な対話の場となった。このことは本シンポジウムのひとつの大きな成果であると思われる。

そして、その中で大学院生の発表が積極的に行われたことも、本シンポジウムの特徴のひとつである。このような大きなシンポジウムにおいて、日仏合わせて５名の学生に発表の機会が与えられたことは、大学院教育を充実させるという「魅力ある大学院教育」イニシアティブの目的との関係においても、非常に意義深いものであったといえよう。

学生である間に、このような学際的、かつ国際的な対話の場に身をおくことは非常に貴重な経験であり、その後の研究活動において、非常に大きな意味を持ってくるだろう。学際的研究の実践の場であるシンポジウムにおいて、どのような研究成果が生み出されたかということも勿論重要であるが、学生が実際にその「対話」の場に身を置く機会を与えられたことも、もうひとつの大きな成果としてあげられるのではないだろうか。ひとつの研究分野に囚われることなく、より広い視野に立ち、日本文化を研究することにつながる機会を得たことは、本シンポジウムに参加した学生にとってかけがえのない財産である。

さらに、シンポジウム後の懇親会など、発表以外の場で日仏の学生の交流が深められたことも特筆しておきたい。特に懇親会では、発表に関することも含め、各自の研究内容に関してお互いに質問しあうなどして発表者同士の交流が図られるとともに、今回発表しなかった学生も含めた学生間での交流が図られた。それはフランス側の学生だけではなく、日本から足を運んだ院生も含めてのものであり、日仏学生間の充実した交流が実現したことは非常に嬉しいことである。海外の研究者と人脈を形成する機会は、特に学生にはなかなかあることではなく、その点でもこのシンポジウムが学生にとって非常に有意義なものであったことは間違いない。

日本研究を従来の枠組みから発展させ、海外での研究成果を導入し、国際的視点を重視した、学際的な領域にするためにも、海外の研究者と日本の研究者の対話は重要であろう。より多くの学生にこのような機会を与え研究の発展を計るとともに、海外研究者とのネットワークを構築していくためにも、このようなシンポジウムがこの後も継続して行われることを期待したいと思う。

ブレーズ・パスカル大学シンポジウム報告書（２００６年０３月２９日）

高島元洋

「テーマ：哲学、倫理、宗教思想ー日本とフランス：交差する視点」
（クレルモン・フェラン：ブレーズ・パスカル大学、哲学・合理性研究センター）

［１］プログラム：
・エリザベス・シュワルツ（パスカル大学、元哲学・合理性研究センター長）「合理主義は比較研究であるべきか」
・三浦謙（本学助教授）「安定性とモジュール性ー科学的知識の本質的特徴」
・ローラン・ジャフロ（パスカル大学、研究科長）「黄金律ー特殊と普遍」
・遠藤千晶（本学博士後期課程）「カントの因果論とヒューム批判」
・石崎恵子（本学博士後期課程）「西田幾多郎の哲学ー場所的論理と平常底」
・小浜聖子（本学博士後期課程）「禅僧白隠の思想の特徴」
・木元麻里（本学博士後期課程・フランス留学中）「唯一性と多様性ーレヴィナスにおける他者の思考をめぐって」
・高島元洋（本学教授、元比較日本学研究センター長）「日本思想の可能性についてー倫理学と倫理思想史」
・頼住光子（本学助教授）「道元の思想構造」
・大久保紀子（本学 AA）「本居宣長における神の概念」
・イヴ・シュヴァルツ（エクス・アン・プロヴァンス大学）「人類の普遍性、歴史的特異性：巧みな制作による導入」
・アラン・プッティ（パスカル大学）「超脱のプロティノス的概念」
・エマニュエル・カッタン（パスカル大学、哲学・合理性研究センター長）「マイスター・エックハルトー離脱、放棄、平静さ」

［２］この発表は、平成 17 年度の本学「魅力ある大学院教育イニシアティヴ：〈対話と深化〉の次世代女性リーダーの育成」の事業により、本学・比較日本学研究センターとフランスのコレージュ・ドゥ・フランス（パリ）、ブレーズ・パスカル大学（クレルモン・フェラン）との共催でおこなわれた国際的なジョイント教育とシンポジウムのひとつである。

なおこの企画全体に、本学ロール・シュワルツ・アレナレス助教授がコーディネーターとして関わっており、その周到な活躍によりフランスにおける東洋学の権威とこれからの若手を配備したシンポジウムが可能となった。その意味でシュワルツ助教授により、国際日本学を海外で構築するうえで最善の環境が準備されたといってよい。

［３］この事業（「魅力ある大学院教育イニシアティヴ」）の成果と今後の意味。

①学生にとって、海外で積極的に発表し学生同士また研究者と交流することが刺激となり、博士論文執筆への動機付けを強化した。

②比較日本学研究センターを中心として、本事業に関連する研究支援体制を充実・強化することで、国際化時代に対応する新しい学問の形（国際日本学）を創出した。

③今回のテーマは、コレージュ・ドゥ・フランス（パリ）において日本学、ブレーズ・パスカル大学（クレルモン・フェラン）では比較思想であった。

日本文化について、能・歌舞伎・茶道というような分野の紹介はあるが、ものめずらしいというだけで実際はそれほど理解されてはいない。文化をたんに特殊なものとして紹介するのではなく、普遍的な人間の生き方を示すものとしてともに議論する必要がある。今回、日本学の分野で文学・演劇・美術などの活発な学問的交流ができたことは評価することができる。これらの分野においては高度な専門性がもとめられ、フランスは充実した交流ができる数少ない国であるという意味でたいへん貴重な企画であった。

つぎに日本思想についてのシンポジウム（比較思想）は、さらに重要な意味があった。これまでも西洋文化と東洋文化の形式的な交流はあったが、異なる文化であるということで議論として深まることはなかった。比較思想の議論は、すでにつくされているようにみえて実際はきわめて中途半端なものでしかない。今回の発表では、日本の哲学・倫理分野の現状を説明し、つぎに日本思想の紹介をした。フランスの研究者は、日本文化を極東の不思議な現象ではなく普遍的なものとして理解し、同様に日本の研究者も似かよった議論をしながら本質的にはことなる結論となる問題に関心をもった。

今後重要なことは、これらのテーマについて、両国の研究者が継続して対話を続けることであろう。

平成 17 年度イニシアティヴ人社系活動報告会

2006.5.12（金）　12：20～13：15　人間文化研究棟 6F 大会議室

小濵聖子（お茶の水女子大学大学院　人間文化研究科　国際日本学）

■参加者による実施報告：フランスにおける２つのシンポジウム（学生）

▼学生からみた成果、感想、継続の意義。

参加したシンポジウム：哲学、倫理学、宗教思想－日本とフランス：交差する視点－

2006 年３月 29 日、ブーレーズ・パスカル大学（クレルモン・フェラン）

・成果：

日本の思想およびその研究内容を知ってもらい、興味を持ってもらうことができた。

沢山の質の高い発表を聞くことができて、知識が深まった。

自分の研究を再度客観的に見直す機会になった。

・意義：

互いの国の言葉（日本語、フランス語）で行った点。

いかに分かりやすく言語で伝えられるかという問題。

互いに交流し、理解しようとする意識の自覚。　ほか

・感想：

実際に行ったことで、その国の地理的条件や歴史・社会的背景といった、生きた現実を感じることができた。それによって、研究にたいする気持ち深まった。

大学内での他の専門の方々、事務局の方々と交流を持てた。

以上

ジョイント教育の可能性　　―日本学コンソーシアムの形成にむけて―

２００６年５月１２日　　小風秀雅

３月１８日（土）日本学コンソーシアム形成に向けた国際予備会議

参加者　　権粛寅（韓国・淑明女子大学校）
尹福姫（韓国・同徳女子大学校）
徐一平（中国・北京外国語大学、北京日本学研究センター）
趙順文（台湾・台湾大学）
Timon Screech（英国・ロンドン大学アジアアフリカ研究学院）
Yan Ｓykora（チェコ・カレル大学）
古瀬奈津子（お茶の水女子大学・次期国際日本学専攻長）
森山新（お茶の水女子大学・比較日本学研究センター長）
小風秀雅（お茶の水女子大学・国際交流室長）

①共同教育方式のメリット

本学を拠点とする国際的ネットワークの構築
単独大学での教育の限界を打破

１）単位互換制の活用　　教育プログラムの共有化
２）集中講義の活用　　実質的な教育指導、教員の相互派遣の充実・強化
３）短期留学の拡充　　共同教育・共同指導の機会の拡大
４）共同ゼミの継続　　留学へのモチベーションの向上、共同指導の充実

②ジョイント・ディグリーへの展望　　長期留学生を対象

③日本学国際キャンプの実施

８大学連合によるジョイント教育の実施と共同ゼミの継続（各校持ち回り）